HENTAI魔法少女

サイレントメロディー
～千年殺し篇～

上田ながの

表紙イラスト：鈴音れな

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『HENTAI 魔法少女サイレントメロディー　千年殺し篇』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

上田ながの

表紙／鈴音れな

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

鳳仙院静音（ほうせんいんしずね）

私立マリアーヌ女学園で生徒会長を務めるお嬢様。とにかくペニスで女の子を可愛がりたいと考えている美少女で変態。サイレントメロディーに変身して魔法少女を犯すのが喜びとなっている。

シフォン

魔法界による人間界の侵略を阻止するためにやってきた魔法少女。自身は魔法を使えないが、静音を魔法少女へと変身させる力を持つ。

ミント

人間を抹殺するために魔法界からやってきた魔法少女。サイレントメロディーに敗れ、彼女無しでは生きられない身体にされてしまう。

エクス

人類抹殺のために魔法界からやってきた魔法少女。大気中のマナを体内に吸収し、致死性の毒ガスに変換して放出する魔法を使う。

汚れた北京の空に、一人の少女が浮いていた。
肩の辺りで切り揃えられた白い髪に、褐色の肌の少女が。
少女はモデルを思わせるようなスレンダーな身体に、黒いロングコートを身に着けている。強風によってコートがはためく――スタイリッシュとしかいいようのない、実に格好いい姿だった。
「あれは何だ？」
最初にその少女の存在に気付いたのは、天安門広場にてああ、今日も空気悪いなぁ～なんて何気なく空を見上げた北京市在住の会社員胡近宝（こきんぽう）氏である。
空に浮かぶスタイリッシュに決めた少女の姿に、胡はポカンッと口を開いた。
「ん？」
胡につられるように数人の北京人民達も足を止め、空を見上げる。
「……人？　夢でも見てるのか？」
「いや……現実だ」
「でも、人が空を飛ぶって……あり得ないだろ」
当然全員が少女を視界に捉えた。皆、胡と同様に口を開き、足を止め、呆然と少女を見つめる。大気汚染のせいで幻覚でも見ているのではないのだろうかとでもいうように、中には必死に目を擦っている者もいた。

けれど少女の姿は消えない。
彼女は間違いなくそこにいる。
「……」
無言のまま、切れ長で、金色の瞳を北京市全域へと向けていた。
ぐにゃり……。
やがて変化が起きる。
唐突に少女の周りの景色が歪み始めた。目眩でも起きているのではないかと錯覚するくらいに、大気がねじ曲がる。
「あ……あれって……まさか……」
その光景に、胡は気付く。気付いてしまう——少女の正体に。
周囲の視線が一斉に自分に集まってくるのを感じた。皆の視線が訴えてくる。
「いうな……それをいうな……」
と。
そう。胡だけではない。皆が少女の正体に気付いていた。気付きつつ、それを否定しようとしていたのだ。
胡だって同じである。自分の予想が外れていてくれと思う。しかし、少女の存在は現実なのだ。だからこそ、恐らく、いや、間違いなく自分の予想は当たっている。というより

も、他に選択肢はない。
黙っていることなどできなかった。
「――魔法少女」
そして、胡はその単語を口にした。
魔法少女。
突如として現れた人類の敵である。人間が住む人間界とは違う〝魔女界〟から現れた侵略者だ。彼女達の目的は一つ、人間界の侵略。その為に、人類を殺す最凶最悪の敵だ。
その能力は一人でも容易に人間を絶滅できるほどのものである。これまでに現れた二人の魔法少女により、日本の北海道は消滅。栃木の半分は人が住めない大地となり、九州の大半はシチューの海に沈んだ。被害は日本だけにとどまらず、フランスのパリ市民は食い過ぎにより全滅している。
これだけでも、どれだけ魔法少女が恐ろしい存在かは分かるだろう。
「……あ、ああ……あぁああ……」
ガクガクと膝が震えるのを感じた。いや、膝だけじゃない。全身が震える。身体中から力が抜けていくのを感じ、ガクリッと地面に膝をつく。
「もう駄目だ。おしまいだ～」
胡だけではない、周囲の人間全員が絶望に表情を凍らせていた。

そんな人民達の視線を受けながら、少女は浮遊し続ける。
瞬間――
ドッグオオオオオオオオンンンンッ！
どこからともなく飛来したミサイルが少女に直撃した。北京上空に爆炎が広がる。大気が震えるほどの爆風が、辺り一帯に広がった。
「うあぁあああ」
胡の身体も吹き飛ばされる。ゴロゴロと天安門広場を転がる結果となった。身体中に痛みが走るが、それを気にすることなく空を見上げる。一体何が起きたのか？　魔女はどうなったのか？
「やった⁉」
同じように空を見つめる一人の人民が呟いた。
「や、やった……やったぞ！」
これに他のものが続く。
「ミサイルだ。人民解放軍だ‼　ははは！　そうだ、我々には人民解放軍がいるんだ！負けない。魔女なんかに負けるものか‼」
「偉大なり！　我が中華人民共和国は偉大なりぃ‼」
歓声が上がる。

無理もない。何しろミサイルが直撃したのだ。いかに魔女といえど、見た目はただの人間と変わりない。ミサイルが命中して生きていられるはずなどない。

常識で考えれば誰だってそう思う。

それでも、胡は周りと同じように喜ぶことができなかった。だってそうではないか。ただのミサイルで倒せるのであれば、パリが全滅することなどあり得ない。北海道が消滅し、九州がシチューの海に沈むなど絶対にない。

だから胡は、皆が喜ぶ中で一人呆然しながら爆炎を見つめる。自分の予感が外れていることを祈りながら……。

だが、最悪な想像は見事に的中してしまう。

消え去る爆炎。中心部には——先程までと変わらぬ様子で少女が浮いていた。

その姿に、全員が呼吸を止める。まるで時が止まったかのように、その場に立ち尽くす。

「……さよなら。人類」

ポツリッと少女が呟いた。

距離は離れているはずなのに、何故かはっきりと耳に届く。涼やかな鈴の音色のような声——まるで死に神の囁きのように聞こえた。

同時に、少女はロングコートの裾を捲る。

次の刹那——

プスウウッ！

空気の抜けるような音が北京市一帯に響き渡った。それと共に、北京の空を覆う汚れた大気を黄色く染めるようなガスが、少女の尻から溢れ出し、都市全体を包み込んでいく。

「な、これ――く、くさぁあああ！」

当然ガスの海の中に胡達がいる天安門広場も沈んだ。途端に、凄まじい臭気が鼻をつく。この匂いは間違いない、スカしっぺの匂いだ。

（それも……多分一月以上お通じが来てない状態のおな――）

そこで胡の思考は途切れる。

北京人民凡そ二千万人は、放屁の匂いに包まれながら全滅した。

＊

「……」

私立マリアーヌ女学園三年松組教室の窓辺に、一人の女生徒の姿がある。

腰まで届く、長く艶やかな黒髪の少女の姿が。

切れ長の瞳に、真っ直ぐ通った鼻梁の少女。その顔立ちは精巧に作られた人形を思わせるほどに整っている。大きく膨らんだ胸元に、キュッと引き締まった腰。そしてヒップは

ツンッと上向き加減――街を歩けば十人中十人が間違いなく振り返るであろう完璧な容姿と体型だ。少女の名は鳳仙院静音。私立マリアーヌ女学園生徒会長にして、清楚、可憐、大和撫子、
純潔、乙女、美の化身、
であり、
人間界に対して侵略を行う魔女界の魔法少女達と唯一戦うことができる人間側の魔法少女――サイレントメロディーである。
そのサイレントメロディーこと、鳳仙院静音は一冊の本を読んでいた。カバーが掛かっている為、どんな本かは分からない。あまり内容に熱中できていないのか、途中でパタンッと本を閉じると、窓の外へと視線を向けてはぁっとため息をついた。
瞳には憂うような色が浮かぶ。表情はどこか悩ましげだ。瞳に苦悩の色を浮かべながら、青い空を見つめる。
「静音様が何か悩んでいらっしゃいますわ」
「あの方のことです。きっと今わたくし達人類が置かれている状況を憂いておられるんですわ。本も読んでいられないほどに……」
「なんてお優しい」
「ああ、優しすぎて苦しむ静音様。お可愛そうですわ」

そんな静音を見て、クラスメート達が悲痛な表情を浮かべた。
「な～んてことを脳内お花畑の皆さんは思ってるみたいだが、何考えてんだ？　悩んでるお前ってなんか気持ち悪いんだけど」
「その……気持ち悪いは言い過ぎですけど、静音さんらしくはないですね。シフォンには話してくれませんか？　何かお悩みごとの解決にはなるかも知れませんし」
静音に対して一歩引いているクラスメート達とは違い、話しかけてくる生徒が二人。
ちょっと口が悪い前者は、金色の髪に金色の瞳が印象的な胸がぺったんこ少女。名前はミント――この世界に最初に現れた魔法少女だ。生命滅殺乳頭破壊光線――使用すると周囲の女性から乳房を吸い取り、ミントが巨乳化する。そして乳首から凄まじい破壊光線を放つ――という魔法を使い、北海道を消滅させ、栃木の半分を死の土地に変えた張本人である。
だが、サイレントメロディーとの戦いに敗れ、現在は静音から定期的に魔力を補給されなければ生きていけない存在に変えられていた。以後、常に静音の側にいなければならなくなり、その為マリアーヌ女学園に生徒として通っている。
後者は銀色のお下げ髪をしたシフォン。人類抹殺を企む黒幕である魔女界の女王の娘でありながら、魔女界を裏切り、人間界にやって来た魔法少女だ。魔女も人も同じく生きている存在。一方が他者を虐げることなどあってはならない。例え母の考えであっても認め

るわけにはいかない――だから母を裏切った。実に心の優しい娘である。しかし、シフォン自身は一切魔法を使うことができない。

その代わり、適格者に魔法界の魔法少女達を遙かに凌ぐ力を与えるという能力を保持している。静音がサイレントメロディーに変身し、人類を守る為に魔法少女と戦うことができるのは、シフォンに選ばれたお陰なのだ。

「……ねえ、ちょっと聞きたいんだけど」

話しかけてきた二人を、静音はジッと見つめた。

「な、何だよ？」

「えっと……その、何ですか？」

真っ直ぐ瞳を見つめると、二人は僅かに顔を赤く染めると、少し恥ずかしそうに視線を外した。静音の整った顔立ちは、同性でも直視できないほど美しいのである。

そんな顔で、

「ねぇ、なんで二次元ドリームノベルズにはスカトロシーンが多いのかしら？」

真面目にそう尋ねる。

「は？」

「……」

二人は完全に思考停止したように止まった。

「駄目です。抜いて――はふっはふっはふっ……ぬいって、抜いて下さい。お、おねぇ、お願い。お願いですぅ。恥ずかしい。んっんっんっ……はずっか、し、しいですぅ」

性感を知っている肉体は間違いなく挿入によって快楽を感じているのだろうが、シフォンは必死に嬌声を抑えつつ、ペニスを抜いてくれと懇願してくる。けれどもそれは逆効果。瞳を潤ませ、熱い吐息混じりの様子で訴えてくる姿に静音の興奮はより煽られた。

「抜きはしないわ。んふふ……ま○こがすごくちんぽを締めつけてくるわ。本当はもっと犯して欲しいんでしょ？　ほふぅ……ほら……んっふ、はぁはぁはぁ……もっと、もっと恥ずかしい姿をみんなに見せなさい。感じまくってる姿を見せてやるのよ」

「ちが、か、感じてなんか……ひ、人に見られて感じなんかしま――あっあっあぁああ」

シフォンが何を言おうと容赦はせず――

どじゅっどじゅっどじゅっどじゅっどじゅっ！

「ふんっふんっふんっふんっふんっ！」

腰を振りたくり、蜜壺を犯す。腰と腰がぶつかり合い、パンパンパンッという乾いた音が教室内に響き渡る。白い尻が赤く染まっていった。

「だっめです。ふっぐ、むふっむふっむふぅうう……。そ、それ以上、し、しないで下さい。お願いですから、もう……もうぅうう！　見られるの、み、皆さんっに、はぁっはあっ、み、られるの、い、いやなんですぅ」

試読シーン
ここから読み放題！

駄々をこねる子供みたいにイヤイヤと首を左右に振る。だが、容赦するつもりはない。
「イヤとかいいながらシフォンのま○こ……はぁはぁ……すごく私のち、ちんぽを締めつけてきてるわよ。ふんっふんっ……。ホントは気持ちいいんでしょ？」
挑発するような言葉を向けながら、膣道を肉槍で蹂躙する。
「違います！　気持ちよ、くなんっか……あっあっ、ありませっん。こんなのは、恥ずかしいだ、だけですぅ」
必死に否定の言葉を吐き出すシフォンとは裏腹に、ピストンのたびに膣壁の締めつけは激しさを増す。肉棒が食い千切られてしまうのではないかと錯覚する程の性感を静音は覚えた。肉壺の収縮に比例するように、分泌される愛液量も増幅していく。牝汁は白く濁り、ねっとりと糸を引くほど濃厚だった。
「気持ち良さそうです。シフォンさん羨ましい」
「わたくしも静音様にあんな風に抱かれたいですわ」
「……た、確かにすげぇ」
女生徒達が羨ましそうな視線を向けてくる。基本静音に対して敵対的なミントでさえも、頬を赤く染め、モジモジ太股を擦り合わせていた。
「や、み、見ないでっ！　あふっ、ふぐっ、むふう……。見ないで下さいぃ！」
当然シフォンは皆の視線に気付く。途端にボッと音がしそうな程の勢いで顔が紅潮した。

それと共にキュウウッと蜜壺が収縮し、これまで以上にペニスを咥え込んでくる。
「はぁあああ……。いいわ。すごく締まってる。最高よ。最高に気持ちいいわ。これ、我慢できない。射精る！　射精るわ！　ふっふっふっ」
ピストンのたびに襞の絡みつきがきつくなっていく。下腹部から爆発しそうな程の射精衝動がわき上がってくるのを感じ、静音はより激しく腰をグラインドさせた。
どじゅっどじゅっどじゅっどじゅっどじゅっ！
「だっめ、あっあっあっ、だっめです。そんなっにされたら、シフォンは、シフォンはぁ！」
「いいわよシフォン！　ほら、ふうっふうっふうっ！　絶頂って！　絶頂くところを私に見せて、私も、私も絶頂くから!!」
マジカルペニーの先端部が爆発しそうな程に膨れあがる。それと共に凄まじいまでの魔力の奔流が、下腹部から全身に広がってくるのを感じた。
「射精る！　射精るわっ！　てぃ、てぃんくっる、ティンクルふ、ふわ、ふわっりん。マホリカマホリカぁああっ！　おっおっ、きらきらりん。まじ――マジカルシャワーでぃ、いい子になぁれ！　い、絶頂くっ!!」
無意識のうちに腰を振りながら変身呪文を唱えると共に、ドジュッと膣奥を激しく突いた。瞬間、肉先秘裂が口を開く。ビクビクビクッと肉茎が激しく震え――
どびゅばっ！　びゅっびゅっびゅっ！　どびゅるっ！　びゅっびゅっびゅばぁああ！

「ふっひ！　きた、熱いのが、シフォンの、シフォンの膣中にぃい！　だっめ、やだ、こんな……皆さんの前でなんていやなのに、い……絶頂く。絶頂くッ！　んっんっんんんんんんん」

膣中に多量の熱液を撃ち放つ。

凄まじい解放感が、完全無欠のお嬢さまの肉体を包み込む。吐き出されるマジカルザーメンがシフォンの膣中を埋め尽くしていった。

カアアアアアアアッ！

同時に教室中を包み込むような閃光が静音の身体から放たれる。その光の中に、身に着けていた制服が粒子となって溶け消えた。お嬢さまの美しい裸身がさらけ出される。

弾ける瑞々しい乳房。絹のように美しい肌が光の中で輝く。ブルルンッと彫像のように作り込まれた肉体には不似合いな程に醜悪なペニスが震えた。

光が静音の肉体を包み込み魔法少女衣装を形成していく。

ピンクを基調とした、過剰なまでにフリフリ、フワフワなリボンで装飾されたドレス。青い宝石が胸元できらりと輝く。白いシルクで構成されたニーソックスが太股まで包み隠し、頭には可愛らしいリボンがポンッと花咲くように作り出された。手を包み込むのはシルクの手袋。可愛らしいピンクのブーツの踵を羽型のアクセサリーが彩る。

そこにいるのはマリアーヌ女学園生徒会長鳳仙院静音ではなかった。

「なっ!?　溶ける。パンツが……。何を考えている？」
分からない。分からない。分からない——。
警戒警報が脳内に鳴り響く。
刹那——
ぐちいいっ！
「くひっ！」
触手の先端が尻を左右に押し開き、肛門に押しつけられた。生温かな感触が尻に直接伝わってくる。
「——なっ!?　どこに触ってる!!　汚い。そこは！」
肛門とは肉体の中で最も不浄で、恥ずかしい場所だ。そこに例え化け物とはいえ触れられるなど、これまで一度も考えたことがない。故に反射的に混乱するような声を上げてしまう。
「汚い？　そんなことないわ。そこはとっても素晴らしい場所なのよ。汚いなんていったら罰が当たるわ」
「サイレントメトロディー。正気か、お前？」
「もちろんよ。まぁ貴女みたいに知識がない子には驚くようなことかも知れないけど、すぐに理解できるようになるわ。お尻がどんなに素晴らしいかをね」

えっちシーン試し読み ここからスタート!

「理解ふの――おっ、おぉおおっ！」
ずどじゅっ！　ぐじゅっ、ずっずっずじゅううっ！
肛門に先端部を密着させただけでは飽き足らず、更に肉触手が蠢き出す。肉穴を押し広げるようにして、体内に化け物が潜り込んでくるのを感じた。
「なにをっ！　くっふ、ふぐっ……くふぅうう。なにっを、してる。汚い場所だ。そこは！　んく……、あっ……は、挿入って、挿入ってくるな！　んふっ、ふむぅうう！　やめろ。おっおっおぉおお！」
排泄する為だけの器官を、醜悪な化け物が逆流してくる。腸内に広がる異物感。肛門が押し広げられていく。
「裂ける！　身体が、私の……。止まれ。駄目だ！　んんん、ふぐっ……はふぅうう」
すべての攻撃を防ぐ絶対障壁も、挿入行為に対しては発動してくれなかった。
ミヂッ！　ミヂミヂミヂイッ‼
「広がるっ！　尻が、私のっ‼　挿入らない！　それ以上‼　むっり、無理ぃいい！　ふぐっ！　ふーふーふー」
肉穴が拡張されていく。身体に穴を開けられていくような感覚に思わず瞳を見開きつつ、必死に括約筋に力を込めてこれ以上の挿入を防ごうとする。けれども強力な魔法を使えるとはいえ、身体能力はごく一般的な人間の少女並みしか持たない肉体では、化け物の力に

対抗することなどできなかった。
蠢く触手が閉じる腸奥へと無理矢理侵入してくる。下腹部に生温かな熱気が広がれば広がるほど、自身の肉体が汚されていくように感じた。
「これ以上……や、やめ……んっんっくふっ……させろ！　ころっす。殺すぞ！」
耐えがたい屈辱。フーフーと荒い息を吐きながら、恐ろしいまでの殺気を込めた鋭い視線でサイレントメロディーを睨み付ける。
けれども魔法少女は涼しい表情を浮かべたまま。それどころか笑みさえも……。
「その顔……感情剥き出しって感じで、とっても可愛いわよ。ふふ、だからもっと虐めてあげるわね♪」
化け物を止める気などさらさらないらしい。
どじゅっ！　ぐじゅぼっ！　ずじゅるるるぅっ！
「ふおぉっ！　あっくひっ！　き、来たっ！　おっく、奥まで！　おっおっほぉおお」
遂に触手は腸奥まで達する。肛門が巨大な蓋で閉じられているような感覚に、エクスは獣のような悲鳴を上げた。
「おっおっ、壊れる。私が……。無理……こんなの……。ふぐっ、はふっはふっはふぅ……。ぬ、抜けっ！　抜けぇ！」
挿入されているのは肛門だというのに、何故か息までつまるような気がし、必死に敵に

対して訴える。
「抜けか……。ふふ、この程度でまいってたらここから先保たないわよ」
しかしサイレントメロディーは聞き届けてくれない。それどころか更なる辱めを示唆する言葉まで向けてきた。
「先？　こ、ここか……ら？　はふっはふっ……。何を言ってる、貴様？」
「ミントのおっぱいを吸ってた触手は一本だけじゃないのよ――っていえば、私が何を考えているのか分かるんじゃない？」
確かに触手はミントの左右両乳房に対して吸引行動を行っていた。
「そ、それがなんだ……と……い――」
言葉は途中で止まる。血の気が引いていくのを感じた。
「まさか」
最悪の想像が脳裏をよぎる。当たって欲しくない予想。
「そのまさかよ♪」
サイレントメロディーはニッコリと微笑む。
最悪の予想は――当たってしまった。
じゅずごっ！　むぢっ！　むぢむぢむぢぃいいっ！
「ふほっ！　おっおっおっ、くほっ！　はいっでぎっだ。ほひっ、ひぉおお！　二本目。

中に、私の！　あっあっあっ……触手……二本めぇえぇ！」
　新たな触手が既に異生物によって押し広げられた肉穴を更に拡張してくる。ただでさえ裂けそうな程に広がっていた肉穴が、より大きく口を開けられていく。じゅぶろろおっと、触手の体液と混ざり合った腸液が、肛門からダラダラと垂れ流れ落ちていった。
「ムリッだ！　無理！　これはぁ！　ふひっふひっふひぃいい！　壊れる。ホントに……ほんどにぃ！　おっおっほぉおお！　おじりが！　わだぢのぉ」
「大丈夫。貴女のお尻は裂けたりしないわ。だってそうでしょ？　貴女の身体は魔力で守られてるんだからね」
　確かにそれはその通り。魔力で守られた肉体は傷つかない。故に尻は限界以上に押し広げられても裂けることなどなかった。
「ぐっる！　おぐまで‼　ひっひっひふぅうう。にほっんめ、二本目の触手まで奥にぃ！　お腹に、私のぉ！　はっはっはぁあああ」
　コートの下である為見えないけれど、間違いなく下腹部は内側から触手によってボコリッと膨らまされてしまっている。
「破れる、おながが、やぶれっる！　ふっく、ふんんんん」
　圧迫される内臓。膀胱が内部から押し潰され――
　じょばっ！　じょぼろろろぉっ！

「ふひ！　でってる！　おっおっ、おじっごででるぅ‼　とまらなひ。おじっごとまらなひぃぃぃ！」

遂には尿道から黄金水が溢れ出した。太股を垂れ流れていく小便。キラキラ光りながら、大地に雨のように降り注いでいく。

「はず……恥ずかしい。恥ずかしすぎる。こんなの……。でっも、駄目だ。でちゃう。止められない！　うっうっふぅうう……」

肛門を化け物に犯されながらの失禁。しかも敵の前で……。涙がこぼれ落ちそうなほどの屈辱を覚えた。

それでも決して泣いたりはしない。それどころか、全身から汗を分泌させつつ、サイレントメロディーを睨む。

「殺す。か……必ず……」

「いい目ね。この状況でもまだそんな目ができるんだ。ふふ……そんな貴女を泣き叫ばせたいわ。もっともっと滅茶苦茶にしてあげられる――そう考えるだけでザーメン射精しちゃいそうよ」

「も、もっと……だと？」

これ以上何をするというのか？

「さて、どこまでその強気を維持できるか……しっかり私を楽しませてね」

パチンッと再び魔法少女は指を鳴らす。

瞬間――

どぶっ！　どびゅっどびゅっどびゅっどびゅっどびゅっどびゅるるっ！

「ふひっ！　おっ、あぁああ！　くっふ、んんん！　はぁあああ」

触手の先端部が腸内で開き、ドクンッドクンッとまるでポンプのように痙攣しながら、生温かな液体をミントの腸内へと撃ち放ってきた。

「出てる‼　ひっひっ！　なっか、お尻のなかに、でってる。なにかが‼　こっれ、なんだ！　はふっ、おっほ、こほぉっ！　駄目だ。なる。いっぱいに、なる！　はらっが、腹がぁあっ！」

一瞬で腸内を液体が満たしていく。ボコオオッと腹がまるで妊娠でもしているかのように膨らむほどの何かが流し込まれた。

「これなんだ？　これなんだぁあ？　おっおっ、はい、入らない。むりっだ。も、もう！　や、めさせろ。ふーふーふーふー……。なる。ぱんっぱんに、なる。腹がぁ！　なんなんだ？　これ、なんっなんだぁ⁉」

「何って……もちろんミントのミルクよ。たっぷり味わってね」

人類を守る正義の魔法少女は、人類を滅ぼそうとする悪の魔法少女に対してとびっきり純粋な、少女のような笑みを向けてくる。

「みるっぐっで……ふほっ！　とめって、駄目。もう！　止めて！　これ、以上!!」
「駄目よ。まだ半分も入っていないんだから……。ちゃ～んと全部お腹で受け取ってね♥」
訴えなど通じない。
どびゅっ！　びゅっびゅっびゅっびゅっびゅうううう！
「ふひっ！　ひっひっひほぉおおお！」
四国上空に魔法少女の無様な悲鳴が響き渡った。

――数十分後。
「……おっおっおっ、もれ、もれっる。ふぐっ……。くっふ、ふーふーふーふー」
知らぬものが見たら妊婦としか思えないくらいに、エクスの下腹部は膨れあがっていた。
ヒクヒクと全身が痙攣する。ギュルルルルッと下品な音を奏でて腹が鳴った。
「全部入ったわよ。どう……ミントのミルクは？　美味しいでしょ？」
「い、いうっな！　ふ、ふざけたこ、ことを……。ふぅっふぅっふぅっふぅっ」
尻に無理矢理流し込まれたものが美味しいはずなどない。ただ辛いだけだ。
「そうね。ごめんなさい」
すると一転して謝罪の言葉を向けてくる。
「そんなにお腹膨らんでるんですもの。それは辛いわよね」

一体何を考えているのかさっぱり分からない。不気味だ。
「すぐにでも流し込まれたものを出したいんでしょ？　うんことして放り出したいんじゃない？」
ニタアッと魔法少女は笑う。
（う、うんこ⁉）
あまりに露骨な言葉に、顔が真っ赤に染まるのを感じた。
「いうな！　下品なことを……。んーんーんんん……ば、馬鹿なことを！　あり、えない。そん……はぁはぁはぁ……なこと……」
「本当に？　無理は身体によくないわよ」
「して……なっい……。無理などぉ……」
敵に対して弱味など見せられない。自分の勝利は最早確定しているも同然。だからこそ、常に勝利者として敵の上に立っていなければならない。それくらいの余裕がなければ、魔女界の連中を見返すことなどできないから……。
「そう……。それじゃあ、本当に貴女が無理していないか、試させてもらうわね」
「ため……す？　何を？」
「簡単なことよ」
サイレントメロディーはこちらの背後に回り込む。首筋に息が届くほどに距離は近い。

なんだかイヤな予感がした。
「こうするのよ」
ニタアッと口元を歪めると共に、サイレントメロディーは未だ肛門に先端部を挿入している触手の尻尾を掴んだ。
「ま、まさか？　や、やめっ――」
敵が何をしようとしているのか理解する。血の気が引いていくのを感じた。慌てて制止の言葉を吐き出す。
だが――
ずじゅぼっ！　じゅぼおおおっ！
「ほっほっひっ！　ひほぉおおおおお！」
聞く耳などない。容赦なく触手を直腸から引き抜いてきた。
（抜けてく！　中から、私のぉっ！　裏返る。からっだが、裏返るぅ！　開く。あなっが、穴が開くぅうう！）
ごつごつとした触手の体表が腸壁を引っ張る。まるで内臓が引きずり出されていくような感覚が走った。ぱっくりと肛門が口を開く。肉穴周りが何度も痙攣した。
当然、散々直腸に流し込まれたものが逆流しようとする。
「おっ、くひっ！　だっめ。おっおっおっ、で、でっる。こっれ、でっるぅ！　だめっだ。

ふぐっ、くっふ、ふーふーふーふーふー」
尻から汚物を垂れ流す姿など、絶対に見せるわけにはいかない。矜持が許さない。必死に括約筋に力を込めて、キュウッと尻穴を引き締めた。
「おっ、で、でっる。これでもぉ！　抑えきれ――はふっはふぅうう……なひぃい」
けれどもそうしたところで便意が消えるわけではない。それどころか下腹に力を込めれば込めるほど、ギュルルルッという下腹部が響かせる下品な音は大きさを増していった。
「ほ～ら、やっぱりうんこ出したかったんじゃない」
「ち、ちがっ――」
「否定しなくていいのよ。認めなさい。認めれば……貴女がお漏らししないように手助けをしてあげるわ。貴女だってこんなところでお漏らしはいやでしょ？」
確かにその通りである。敵に見られながらの脱糞などあってはならない。
（でも……）
その為に敵自身にすがりつくなどできるはずがない。
「貴女の勝ちは決まってるんでしょ？　だったら少しくらいの恥なら見せたっていいんじゃない？　どうせ私達は死んじゃうわけだし」
悪魔のような囁きが投げかけられる。
いわれてみればその通りなのかも知れない。既に〝キリング・ブレイク・ウィンド〟の

チャージは半分以上終了している。サイレントメロディーを筆頭に人間界の生きとし生けるものの命は、あと僅かしかないのだ。であるのならば、ほんの少しくらい恥を掻いてもいいのではないだろうか？　排泄行為を見られるよりは、その方がずっといい気がする。

「ほ……はぁはぁ……本当か？　手助けする……嘘はないな？　その、こ、言葉に」

「もちろんよ。私は正義の魔法少女サイレントメロディー。私の活躍を楽しみにしてくれている（大きな）お友達の為にも、絶対に嘘はつかないわ」

何か途中で妙な単語が混ざったようではあるが、気にしている余裕はない。

「わ……分かった。み、認める。もれ……漏れそうなんだ。だから……助けろ」

敵に救いを請う――実に屈辱的な行為だったが、背に腹は代えられなかった。

「漏れそう？　何が？　はっきりいってくれないと分からないわよ」

「そ……それは……」

「さあ、ほら、いって……」

「だ……だからう……こだ……」

心臓が止まりそうな程の羞恥を覚える。顔が真っ赤に染まった。

「何？　聞こえないんだけど……」

「だから……う……うんこ！　漏れそう。うんこが！　助けろ！　だから！」

露骨な単語を口に出す。頭がどうにかなってしまいそうなくらいに恥ずかしく、屈辱的

だった。
「そっか……うんこが漏れそうなのね。それは大変ねぇ。でも……助けて欲しいならもっといい方ってものがあるんじゃないの？　ほら、もっと可愛くいって」
「き、貴様……」
こいつは外道だ。人でなしもいいところだ――反射的に睨んでしまう。
「あら、反抗的な目……。そんな目をしていいの？　助けて欲しいんじゃないの？」
「それは……くぅうう……」
言い返せない。従わざるを得なかった。
「……欲しいです。下さい。助けて……。もう、無理で……す。だから……します。お願い。ください。助けて……。漏れそうなんです。う……うん……うんこが……」
屈辱に身悶えながらも下手に出るしかない。必死にサイレントメロディーに懇願する。
「そっか……ふふ、可愛いわ。そんな可愛くされちゃ仕方ないわね。そんなに頼まれちゃ……助けないわけにもいかないわ。というわけで、貴女のお尻に蓋をしてあげるわね？」
「ふ、蓋？」
一体何をするつもり？　小首を傾げた刹那――
どじゅっ！　じゅずぼっ！　じゅぶぶぅっ！
「ふひっ！　おっ、かはっ！　おっおっ、な、なんだこっれ？　あ、あつっい。挿入って

来た。熱いのが、尻に――私のぉっ!!」
直腸に再び異物感が広がるのを感じた。
触手よりも長さや太さはないものの、硬く、熱いものが下腹部を満たしていく。
「なんっだこっれ？　い、いれったぁ!?　なにをぉ！」
「んふっ……。はっはっはふぅ……。んふふふ……な、何って……もちろん〝ナニ〟よ」
挿入されたものはサイレントメロディーのペニスだった。空中立ちバック状態で、マジカルペニーが直腸を押し広げる。
どじゅんっ！
「くほっ！　おっおっおぉおお」
手加減などしてはくれない。一気に腸奥まで、肉槍で挿し貫いてきた。バチュンッと腰と尻がぶつかり合う。途端に全身が痺れるような刺激が走った。
「あふっ」
何故こんな感覚を自分でも覚えてしまうのか分からぬまま、どこか甘みを伴った吐息を漏らしてしまう。
「あら？　もしかして気持ちよかった？　貴女ってもしかしてマゾ？」
「きも――気持ちよくなどなっい！　いうな！　ふ、ふざけたことをぉ！　ぬっけ！　抜けぇっ！　ころっす。殺すぞぉ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/